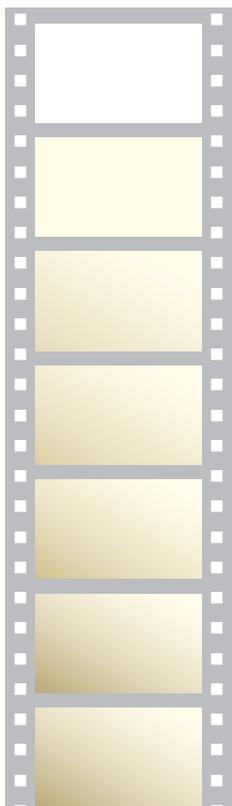


伸^{ノブ}さんのシネマトーク

鈴木 伸夫



第十九回 「自然と人間①」

世の中で恐ろしいものを順に並べた言葉に「地震、雷、火事、親父」があります。

今年（平成23年）3月11日金曜日に発生した「東日本大震災」は、その言葉を超え、「大地震」による「大津波」となり、日本列島を襲いました。

そして、住民の尊い生命や財産を一瞬のうちに破壊していききました。この大災害により被災された皆さまにお見舞申し上げますとともに、犠牲になられた皆さまのご冥福を心からお祈り申し上げます。

実は、ぼくにも「台風」という自然災害の体験があります。小学校6年生の夏休みに父の転勤が決まりました。次の赴任地は、愛知県豊橋市から70キロしか離れていない大都市、名古屋市でした。

東海地区の小中学校は、東北地区の学校と違い、夏休みが8月末までと長く、その代わり冬休みが短いのです。反対に東北地区は、夏休みが短くて冬休みが長いと規則で決まっていました。

9月1日から二期が始まり、ぼくは手続きをした学区の小学校へ転校生として登校しました。初めての転校で、担任の先生から「鈴木君、ひとこと挨拶を！」と言われた時は、事前に何も聞いていなかっただけに「びっくり!!」しましたが、「豊橋の松葉小学校から来ました鈴木伸夫です。よろしくお願いします」と、自分でも驚くくらい冷静にクラスメイトの前で挨拶したことを覚えています。学校は北区にある金城小学校でした。

名古屋市内で暮らし始めて1ヵ月もたない9月下旬、台風がやって来ました。その台風15号は、紀伊半島の潮岬に上陸し、記録的な被害を出しながら本州中央部を横断し、翌日朝、北海道方面へ去ったのです。この台風は、昭和の三大台風のひとつ「伊勢湾台風」（「室戸台風」、「枕崎台風」と呼ばれました）。

あの日は、昭和34年9月26日土曜日でした。台風の影響で朝から雨が降り、風も強くなっていききましたが、土曜日で、学校はお昼で終わりでした。また、明日は日曜日で休日という、生徒にとって最高の週末でした。雨と風がなければ…。

午後7時、毎週土曜日は、地元のアマチュア芸人がプロ級の芸人と対戦するロー

カルテレビ番組「街のチャンピオン」が毎週放送されていました。司会は、テレビ映画「スーパーマン」(53年製作・主演 ジョージ・リーブス)の吹き替えでおなじみの「大平透^{トオル}」でした。午後7時といえば、我が家のテレビは、ニュースの時間と決められているのですが、土曜日に限ってこの番組を観ることが許されたのです。丸いちゃぶだいを囲み、家族で食事をしながらテレビを観ていると、急に押入れの中からポタポタという音がすると同時にまっ暗になり、何が起こったのかわかりませんでした。父が仏壇の太いローソクに火をつけ、辺りを見回したところ、押入れの天井から雨水が入り、布団が濡れていたのです。きつと風圧で屋根の瓦が飛んで、雨水が入って来たのでしょう。「これは大変!」と父と二人で押入れの布団を移動しました。しかし、時がたつとともに雨も風もしだいに強くなり、外では屋根の瓦が飛び、家の中では畳が水浸しの状態になったのです。

部屋の窓は雨戸があり、ガラス戸は大丈夫でしたが、玄関に雨戸はなく、玄関にぶつかった瓦がガラス戸を破り、それとともに強い風が家の中に入って来ました。

このため、ローソクの火は消え、手探りの状態になったのです。

気がつくくと、食事をしていた八畳間の天井は、弓なりになったり、へこんだり、下から見上げるともう少しで天井ごと落ちてきそうな気配でした。

この借り上げ社宅は、屋根続きで隣りが大家さんの住宅になっていて、父が「大家さんの住宅へ避難しよう」と言ったのです。裏口から大家さんの家の裏口へ、靴を履き、暗い中を壁づたいに外へ出てみると住宅の形は残っているようでした。大家さんの家の中へ入ると、中はぼくたちが借りている住宅とほぼ変わらない様子でした。

11才のぼくと姉と母は、大きな被害のないことを祈って、手をつなぎ合い、台風が通過するのを待ちました。そして、台風一過の朝を迎えたのです。初めて台風の恐さを知ったぼくは、天気予報で台風上陸の情報を知ると、懐中電灯に乾電池、トランジスタラジオ、雨戸が飛ばないように雨戸と雨戸のつなぎ合わせる作業など、「これは自分の仕事」と率先して台風の被害予防の準備をしました。

「自然と人間」を考えさせてくれた台風15号こと「伊勢湾台風」は瞬間最大風速、名古屋気象台始まって以来の45・7 mを記録、送電線をズタズタにし、市内をまっ

暗に、そして水浸しにして去って行きました。「自然」の前に、「ぼくはただ逃げる無力な人間だけでしかないのか？」と考えさせられる体験でした。

(続)

(文中敬称略)

伸

平成23年5月